

司会：板橋暁子氏（東京大学東洋文化研究所・ASNET）

\* \* \* \* \*

[illegible]

日本・アジアに関する教育研究ネットワークという機関が、「アジアを知る」というイベント枠において今回のシンポジウムを開催することは、アフリカの女性たちが現在苦しんでいる問題をあえてアジアに引き付けているかのように、つまりアジアについて語るためにアフリカを利用しているように感じる方もお

られるかもしれません。改めて趣旨説明をさせていただきますと、日本は1945年の敗戦時に膨大な記録を焼却・廃棄しましたが、現在明らかになっている事実からのみでも、近現代の制度的・組織的な戦時性暴力に関して、日本は本来ならば最も研究の蓄積があるべき国であり、また当事者、加害者としての意識が最もそなわっているべき国だといえます。アジアとアフリカとで空間や時期は異なっても、軍隊の構造的暴力という共通した本質をもつ過去の事例と現在進行中の事態を接続してとらえ、再発防止という目標に我がこととして向かい合うことは、世界から戦時性暴力を根絶するという、ムクウェゲ医師やこの映画の製作関係者の方々の願いに背かないことだと考えております。

## 映画「女を修理する男」 ティエリー・ミシェル監督、2015年、112分 配給：ユナイテッドピープル

### デニ・ムクウェゲ医師について

1955年、コンゴ民主共和国（旧ザイール）東部ブカヴ生まれ。  
産婦人科医・人権活動家。

1999年、ブカヴにパンジ病院を設立し、これまで5万人以上の性暴力被害者の治療と支援にあたってきた。さらに、パンジ基金も設立し、被害者の保護活動だけでなく、本質的な問題解決のために国連本部をはじめ世界各地で性暴力被害に関する演説を行っている。

2018年ノーベル平和賞を、イラク人活動家ナディア・ムラド氏とともに受賞。

出所：特定非営利活動法人 RITA-Congo（旧称：コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC））ウェブサイト <https://www.rita-congo.org/dr-denis-mukwege>



ムクウェゲ医師のご経歴やご活動に関しては、いま画面にも映しておりますが、本作品の日本語字幕監修者でもある米川正子先生が代表を務めておられる「特定非営利活動法人 RITA-Congo」という NPO 法人のウェブサイトに掲載されている記事が、日本語で読めるものとしては最も詳しく信頼性の高い情報かと思います。時間がないため逐一ご紹介することはできませんが、興味を持たれた方は、後ほど同法人のウェブサイトをご確認いただければと思います。「女を修理する男」という日本語タイトルに違和感をもたれた方もおられるかもしれませんが、これに関しても同ウェブサイトには解説がありますので、ご参照ください。

画面上のこの地図は同ウェブサイトからの引用ではありませんが、本作品の主な舞台は、かつてザイールと呼ばれていたコンゴ民主共和国の東部にあるブカヴという町、ムクウェゲ医師が運営されている病院のある町です。地図のとおり、ルワンダやブルンジと隣接しています。

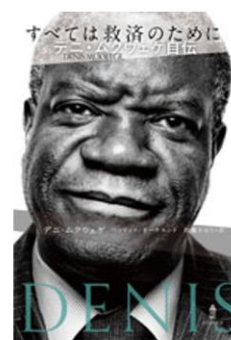
「女性と少女にとって世界最悪の場所」とも描写されるコンゴ東部。

コンゴ戦争が勃発してから20年以上が経つ。その間、「紛争鉱物」の実態に関する認知は高まり、国際社会はその予防策に取り組んできた。しかし、コンゴ東部の状況は改善されないまま、この地域に住む人々の苦しみは続き、大勢の女性、少女、そして男性が性暴力の被害にあっている。紛争鉱物、グローバル戦争経済と組織的な性暴力は相互関係にあるが、その事実はほとんど知られていない。

映画『女を修理する男』は、暗殺未遂にあいながらも、医療、心理的、そして司法的な手段を通して、婦人科医のデニ・ムクウェゲ氏が性暴力の生存者を献身的に治療する姿を映している。それに加えて、生存者の衝撃的な証言、加害者の不処罰の問題、希望に向かって活動する女性団体、そしてこの悲劇の背景にある「紛争鉱物」の実態も描かれている。

出所：特定非営利活動法人 RITA-Congo（旧称：コンゴの性暴力と紛争を考える会(ASVCC)）ウェブサイト

<https://www.rita-congo.org/dr-denis-mukwege>



左：米川正子著『世界最悪の紛争「コンゴ」——平和以外に何でもある国——』

創成社、2010年5月

右：デニ・ムクウェゲ著、加藤かおり訳『すべては救済のために デニ・ムクウェゲ自伝』

あすなろ書房、2019年4月

作品の背景となったコンゴ紛争については、画面で引用させていただいたように、RITA-Congo のウェブサイトですく詳しく解説されていますが、日本語で出版された関連書籍としては、こちらに挙げたものなどがあります。

左側は RITA-Congo 代表の米川先生による著作、こちらは 10 年前のものなので状況は現在と異なる部分もあるかと思いますが、難民支援専門の研究者による一般向けのコンゴ紛争解説書としては代表的なものかと思いますが。右側はムクウェゲ医師ご自身による自伝の日本語版になります。共著者のオーケルンド氏による、膨大な量のインタビューにもとづくものです。

それでは、『女を修理する男』の上映を開始いたします。なお、配給元の規定に従い、映画上映中は Zoom ホスト側もレコーディングを停止いたします。ご視聴いただいている皆様も、何らかの方法によるレコーディングはご遠慮ください。それでは開始いたします。

\*\*\*\*\*

『女を修理する男』上映時間 112 分間

\*\*\*\*\*

板橋：今から講演会に入りたいと思います。なお、映画上映中は中断しておりましたが、今からのご講演とその後の質疑応答はレコーディングさせていただきますのでご了解ください。質疑応答の時間になりましたら、まずチャットでのご質問投稿をお願いいたしますが、ただし、ご講演中のチャット投稿はご遠慮ください。





いま、wam ウェブサイトのトップページ URL、および今月末まで開催される特別展のお知らせをご参考として映させていただいております。

ここからは、wam 名誉館長の池田恵理子先生にご講演をいただきます。

wam は正式名称をアクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」といい、2005 年 8 月 1 日に東京都新宿区で開館しました。日本政府や自治体から支援を受けず、会費・入館料・募金などの収入により自立し、NPO 法人「女たちの戦争と平和人権基金」の事業として運営されています。

wam は開館以来、「慰安婦」被害と加害の証言や記録を中心に日本軍「慰安婦」制度の実態と世界各地での戦時性暴力の記録の収集・公開・保存活動をつづけてこれ、一般公開のセミナー・講演会等も数多く開催してこれました。

2007 年には“カトリックのノーベル賞”とも呼ばれる「パックス・クリスティ平和賞」を受賞され、2013 年には「日本平和学会・平和賞」を受賞されたように、平和と人権回復のための精力的な活動により国内外で高い評価を受けてこれました。本日これから詳しくお話いただけるかと思いますが、ムクウエグ医師が 2016 年の来日時に訪問先として wam を選ばれたのも、そのような国際的に確立された評価があったことと思います。

本日ご講演いただく池田名誉館長は、NHK のディレクターとして「慰安婦」の取材と番組制作を経て「慰安婦」支援活動を始め、NHK を定年退職後、2018 年 3 月まで、wam の館長をお務めでした。wam の開館に先立つプロジェクト段階には建設委員長として設立に関わってこれ、wam の歴史をまさに担っておられる方でもあります。本日は戦時性暴力という観点から、wam とムクウエグ医師とのご交流、また wam のこれまでのご活動等を、ご自由にお話しいただければと思います。それではどうぞよろしくお願いいたします。

\*\*\*\*\*

池田：宜しく申し上げます。池田恵理子です。私は現在 wam を仲間達と運営しております。ムクウエグ

さんとは2016年10月2日にwamに来られた時に初めてお目にかかり、その後に『女を修理する男』を見ました。今回改めて、この凄惨な性暴力、様々な事例と訴え、戦場の酷さに愕然としながら映画を見ました。そして、このような性暴力はコンゴだけの問題ではなく、世界中の紛争地や戦場で蔓延している訳ですから、本当に根絶していかなければ……という思いを新たにしました。語られる様々な性暴力の中には、年齢に関係なく生後2ヶ月の赤ちゃんから、4歳や2歳の少女たちを強かんしたり、その子たちの母親や姉妹を強かんし、それを取り囲んで皆で見る……という酷いやり方、さらには、性器に棒を突っ込んで傷つけることも出てきました。こうした細部は、確かにコンゴのケースですが、「慰安婦」被害者や元日本軍兵士の様々な証言を聞いておりますと、決して日本軍がしていないことではありません。ただ、赤ちゃんを強かんする、というケースは聞いたことはありませんが……。インドネシアに侵攻した時の日本軍が8歳の少女を強かんしたことはあり、被害を受けたご本人に会ったこともあります。その他のことに関しては、日本軍もやっています。ですが、こうしたことを知らないままに今私たちは暮らしているので、もう一度、自分たちの国の戦争の歴史を検証しなければならないと思います。

ムクウェゲさんが2016年に来日されたのは、韓国でのソウル平和賞の受賞式の前に日本に立ち寄られた時で、来日した翌日にwamに来られました。そして、館内の展示や2000年の女性国際戦犯法廷のビデオをご覧になって、とても感じ入っていることがよく分かりました。「兵士たちは女たちの体にやりたいことを何でもやったんだ」という証言を知ると、ムクウェゲさんは「コンゴでも私は同じことを何度も聞きましたよ」とおっしゃいました。強かんは、「魂の殺人」と言われるように、被害女性の身体と心を傷つけるばかりか、その人生をも傷つけてしまうものですが、依然として世界に蔓延っています。今回の映画でも、加害者は事実を認めて裁かれるべきであり、国家も真正面から取り組まなければならないと訴えています。ムクウェゲさんは、日本軍の「慰安婦」制度と「慰安婦」被害に関するwamの展示をご覧になった後、「やはりこれは日本政府が放置することなく、解決しなければならない問題だ」と感じられたようです。その様子は、私たちの話を受け止めるムクウェゲさんの表情からも分かって、非常に心強かったですし、共通の問題を抱えているのだということを強く思いました。そういう意味で、wamにとってもムクウェゲさんとの出会いは非常に貴重な体験でした。

ただ、残念だったと思うのは、NHKとTBSがムクウェゲさんに同行取材していましたが、両局のニュースの中にwamが登場することはありませんでしたし、ムクウェゲさんのコメントの中で、「慰安婦」問題との共通点に触れた部分も紹介されることはありませんでした。それから、ムクウェゲさんは韓国でも講演や記者会見などをされて、そこでも、コンゴでの性暴力被害と「慰安婦」制度における女性たちの被害には多くの共通点があり、解決しなければならない……ということを随分語っておられるのですが、残念ながらそのような言葉が日本国内で報道されることはありませんでした。さらに、ムクウェゲさんとイラク人活動家ナディア・ムラドさんが2018年のノーベル平和賞を受賞された後の記者会見でも、ムクウェゲさんは「慰安婦」問題について言及されたようですが、それも日本で報道されることはありませんでした。

これは非常に象徴的なことだと思います。日本軍による「慰安婦」被害はアジア全域に凄まじい数が発生したにも関わらず、戦争犯罪としては戦犯法廷でほとんど裁かれていません。日本政府による実態調査も2回しか行われてきませんでした。各国の被害女性が日本政府を訴えた民事裁判は10件にのぼりました。それらの審理の中で、原告の女性たちへの聞き取り、加害証言をして下さった何人もの元兵士による証言、そして、研究者や市民が各地で発掘した証拠や資料——日本軍の上層部は、日本が戦争に負けると見当がついた時点で慰安所関係の資料を燃やすように指令を出していて、そのため証拠資料は非常に少なくなって

いるのですが、それでも探せばいくつも出てきており、今も発掘されています——それらを通して、「慰安婦」制度の被害実態はこういうものだということが分かってきて、アジアの被害国も世界もこの問題を理解するようになってきました。ところが、加害国・日本の国中では、この問題は封殺されるようになってきました。実際には、1997年に中学校の歴史教科書の全てに「慰安婦」について記述されるようになった時から、「慰安婦」制度をなかったことにしたいと思っている人たちは、——これは長期政権を維持した安倍元首相を筆頭にした歴史修正主義者、右派、右翼団体などですが、——「慰安婦」の証拠はない、強制連行の証拠はなかった、「慰安婦」は性奴隷ではない……ということを繰り返して言ってきました。安倍政権下では、教科書会社に対して、「慰安婦」についての記述を教科書からなくさせようというバッシングが猛烈でした。そのため、2006年には「慰安婦」という言葉が中学校の教科書からなくなりました。

私がNHKのディレクターだった時、1991年から96年までに8本ほど、ETV特集などで「慰安婦」問題を取り上げる番組を作りましたが、97年以降は何回企画を出しても番組を作らせてもらえませんでした。後になって、NHKアーカイブズの記録を見てみると、「慰安婦」を取り上げたニュースはいくつも出てきますが、1997年以降15年間くらいは、ドキュメンタリーとか調査報道の番組がほとんど作られていないという実態が分かりました。

「ファシズム政権は教育と報道を抑えることで、国民の意識をマインド・コントロールする」とよく言われます。ナチス・ドイツもそうでしたし、大日本帝国もそうでしたが、こと「慰安婦」問題に関しては、「教育と報道」が統制された日本も同じなのです。「慰安婦」被害が訴えられたのは、1991年8月14日に韓国の金学順（キム・ハクスン）さんが立ち上がって、「私が被害者だった」と言われてからのことです。それからアジア各国の被害女性が名乗り出るようになりました。ですから、「慰安婦」の支援団体ではキム・ハクスンさんが名乗り出た8月14日を国際的な「慰安婦メモリアル・デー」として、毎年、日本や世界各国でこの日を記念し、「戦時性暴力を根絶しよう」と声を上げているのです。

wamのサイトでは、日本軍慰安所マップを掲載しています。（<https://wam-peace.org/ianjo/map/>）

昨年12月、2009年更新のデータにさらに調査を進めて、新しい発見や調査結果なども加えてリニューアルしました。細かい地点がマッピングされていますが、1地点ずつ検索すると、どのような証拠や資料で慰安所と被害が分かったのか、その出典リストまで出てきます。ですので、国内外の研究者の方に非常に喜ばれて、「役に立ちます」と言われています。これを見ると、アジア全域にわたって、膨大な数の女性たちが被害に遭っていることがわかります。このような証拠や資料があるにも関わらず、「慰安婦」を教科書から削除して「教育」から排除し、マスメディアには政府や自民党からのいろいろな干渉で、メディアが自己規制や自粛・忖度して「慰安婦」問題に触れないようにさせ、「慰安婦」問題がタブーになってしまった。今の日本は大変困った、忌々しい状態にあります。

ムクウェゲさんは、ご自分が暗殺されそうになって一時はヨーロッパに逃げましたが、コンゴの女性たちの「帰ってきてくれ」という声を受けて、帰って来られてからずっと、治療と女性たちへの丁寧な聞き取りを行って、女性たちを支えています。また、国際舞台では様々なところに出向いて、戦時性暴力問題を国際世論に訴えてこられました。こういう活動を見ていると、私たちも頑張らなければならないと思います。こういうことをやっている方がいらっしゃるというのは、とても励まされますし、それが世界で認められるというのはとても素晴らしいことだと思っています。今では戦時性暴力、強かんは女性への残酷な人権侵害であって、深刻な戦争犯罪だ、ということは国際的な常識になっています。しかし、こうした意識が

作られてくるまでにはとても長い時間がかかり、残念ながら、ごく最近のことであるということは、皆さんにも考えていただいた方がいいのではないかと思います。

女性差別の問題は今でも変わらずにありますけれども、女性への人権侵害、女性への性暴力をなくして、いこうという大きな動きが始まったのは近年になってからのことだと言っていると思います。実際には1975年に国連の国際女性年が始まり、第1回目の世界女性会議はメキシコで行われ、5年、10年毎に会議が行われてきました。そして、1985年にナイロビで行われた第3回世界女性会議で女性への暴力の問題が議論されましたが、その時は家庭内暴力の問題が中心でした。その次、1995年に北京で行われた世界女性会議の時に、初めてと言っていると思いますが、紛争下における女性への性暴力の問題が焦点になったのです。この時は日本から5000人もの女性が参加して、私はその頃ETVの番組を作っていましたので、3本シリーズの特集を作るためにチームを組んで会議取材しました。その北京会議の盛り上がりや熱気のこと、忘れられません。会議での大きな焦点は戦時性暴力でした。やはり、1991年に韓国キム・ハクスンさんが名乗りを上げたことによって「慰安婦」問題がスタートしたことが、世界のさまざまな地域で性暴力に苦しむ女性たちを奮い立たせ、運動に駆り立てる大きなきっかけになったのだと思います。今では、2017年から始まった#MeToo運動が世界中に広まって、日本でも展開されていますが、「#MeToo運動の元祖は『慰安婦』の被害女性たちだ」とよく言われています。「自分たちの受けた性暴力の被害を恥だと感じ、隠しておかなければという気持ちで黙っているのではなくて、立ち上がって加害者をはっきりさせて処罰してほしい、きちんと責任を取らせたい。それが紛争下であれば、その国や軍隊を戦争犯罪として訴えていくんだ」という盛り上がりを実感できたのも、1995年の女性会議でした。

また、私たちがよく「セクハラ」と言っているセクシャル・ハラスメントも、性暴力の犯罪だということは常識になっていますが、日本では去年4件あった性暴力の被害を詠えた裁判で全てに無罪判決が出ており、非常に認識が甘いというか、浅い点がたくさんあります。それでも、多くの人が「セクハラ」と言ったら性犯罪だと受け止めています。ただ、日本で「セクハラ」という言葉が使われるようになったのは、ごく最近です。1989年に福岡の女性が名前を名乗って、自分のセクハラ被害を裁判で訴えました。「セクハラ」はその年の流行語大賞の新語部門を受賞しました。当時は初めて耳にする言葉でした。

少し話は逸れますが、現在でも、強かんは女性の恥とされて自己責任を問われ、被害を訴えることも出来ないような因習が残る地域はまだ残っています。「慰安婦」の調査をしていて次第に分かってきたのですが、イスラム教のある宗派の中には、強かんを受けた女性がその責任を問われて、父親等の親族がその被害女性を殺すことが出来るという因習を持つところもあれば、台湾の山岳民族の一部では、強かんされた妻や娘を殺すだけではなくて、その加害者をも殺すことが出来るというしきたりがある地域もあります。そのようなところでは、「慰安婦」被害を訴えようとしても、もしそれを訴えたら自分の父親が怒って日本軍の部隊に飛び込んでいって兵士を殺すかもしれない、そんなことをしたら父親は簡単に殺されてしまう。それは困るから、自分が日本軍の雑用係として部隊に雇われつつ、そこで「慰安婦」にされているという事実を両親にも言えない女性までいました。

このように、戦時性暴力だけではなく、強かん自体が女性への人権侵害として認知されるようになってからの歴史は浅いのです。そうであるが故に、私たちは新しく直面する重要な人権侵害問題として、真剣に取り組んでいかなければならないと思っています。

また、「慰安婦」被害者の方々は高齢になって、多くは亡くなられています。私も中国の山西省の被害女性の裁判支援や医療支援を仲間たちとやってきましたが、日本政府を訴えた被害女性は全員が亡くなられ、

今は娘さん、息子さんの世代と共に取り組んでいかなければならない状況になっています。

「慰安婦」制度を否定する歴史修正主義者について、「記憶の暗殺者たち」と言うことがあります。彼ら、「慰安婦」の存在を認めない人達は、被害女性がみんな死んでしまえば、日本は責任を追及されることはなくなるだろうと思っていますけれど、これはそんな生易しい問題ではありません。被害者が全員亡くなれたとしても、その次の世代も社会も、決してこの問題を忘れることはありません。日本政府が、この加害事実を認めて公式に謝罪して賠償し、記録を残すための教育や資料館創りといった、きちんとした対応をしない限りは、何年、何十年経っても問題は解決しません。元人権高等弁務官だった南アのナミ・ピレイさんが韓国で行われた講演会で「このような問題では、何十年、何世紀経っても国家の責任は問われ続ける。日本政府はすぐには変わらないでしょうが、私たちは常に窓をたたき続け、一生懸命努力するしかないのです」とおっしゃって、私たちはとても励まされました。

この映画を見ていきますと、コンゴの状況やムクウェゲさんの活動がよくわかり、被害を受けた女性たちが少しずつ元気になり、言葉を獲得していくようすも見えてきます。そして、最後の方では、「地域の男たちは何をやっているんだ、男たちも立ち上がろう」とムクウェゲさんが呼びかけると、みんなVサインなどをしながら立ち上がりました。男たちも少しずつそうした気持ちを共有していくのを見てみると、希望を感じます。社会全体を動かして、本当の意味で性暴力の根絶に至るには時間がかかると思いますけれども、やり続けなければならないことだと思います。

最後に、宋神道（ソン・シンド）さんのドキュメンタリー映画の紹介と、wamの映像アーカイブズの紹介をさせてください。宋神道さんは「慰安婦」にされた経験を持つ在日韓国人の女性で既に亡くなっていますが、宮城に住んでいて最後は東京に移ってこられました。東北弁が達者で非常に元気なおばあちゃんでした。彼女を描いたドキュメンタリー映画『オレの心は負けてない』は12月16日までYouTubeにて無料で見る事が出来ます。とてもいい映画ですから是非ご覧下さい。

それから、wamの映像アーカイブズについてです。私はNHKで「慰安婦」の番組を作れなくなってしまったから、若い女性たちと一緒に「ビデオ塾」という「慰安婦」被害者や元兵士の証言を小型ビデオで記録して保存・公開するNGOを創りました。女性国際戦犯法廷（以下、女性法廷）の時には、ビデオ塾としては初めての経験でしたが、インターネット中継で女性法廷の4日間の審理のプロセスを世界に発信し続けました。今、期間限定でwamのサイトで、女性法廷の4日間をまとめた記録映画を無料で公開しています。これだけでなく、記録映画のダイジェスト版や、北京会議で大活躍された朝日新聞元記者の松井やよりさん——松井さんは、女性法廷を提案されて実現した人であり、wamを創ることも提案されたけれど、癌で68歳の若さで亡くなられたのですが——の記録なども見る事が出来ます。関心を持たれた方は是非見ていただければと思います。それでは、遅くなってしまいましたが、私の話はこれにて終らせていただきます。ありがとうございました。

板橋：池田先生、本当にありがとうございました。

\*\*\*\*\*

板橋：それでは質疑応答に入りたいと思います。まず、私の方から質問させていただきます。

先ほどのご講演でムクウェゲ医師と奥様がwamをご訪問なさったということをお話いただきましたけれ



ども、一番最初の時点でどのような経緯でムクウェゲ医師は wam の活動をお知りになったのか、外国で発行されている英語やフランス語などの出版物によってか、もしくは国際会議での報告などによってでしょうか。

池田：きっかけについては私は知りません。ムクウェゲさんを迎えられる団体の方から打診がありまして、「関心を持たれているので wam に行ってもいいですか」ということだったと思います。私たちも、英語でも情報を流していますし、いろんな国際会議では発言もしております。海外の方たちが日本軍の「慰安婦」制度のことを知りたいと思った時、通常であれば、国公立の博物館やミュージアムのような公的施設に行けばいい訳ですが、日本にはそれがまったくないものですから、全部 wam に来られるのです。外国のメディアの取材にしても、研究者の方々にしても、問い合わせ先と訪問先の筆頭は wam になっているようです。なので、wam に来られたのも不思議でもなんでもなくて、こういう方もいらっしゃるのだなと思って、私たちは喜んでお迎えした次第です。

板橋：なるほど、本来、外国であれば国立や公立の機関で担われるべき……

池田：……ものですよ。私たちもそれを望んでいるのですが、今は日本政府がまったく逆のことをしておりますので、このように細々と民間でやっていくしかないというところ。女性法廷を開催したのも、実際に日本の裁判所がきちんと戦争犯罪の責任者を処罰することも含めて、司法の役割を果たしていれば必要がないものでした。ところが、韓国の被害女性たちは日本政府を刑事告訴するために、1994 年という早い段階に告訴状を東京地検に出すために日本までやって来ましたが、門前払いでまったく受けつけてくれなかった。そして損害賠償請求の民事裁判は 10 件起こしましたが、全て最高裁まで行って原告の方たちの請求は棄却されてしまいました。日本の司法が対応してくれてない、裁いてくれない訳です。ですから、民衆法廷というイレギュラーな形ではありますが、戦犯法廷を自分たちの手で行って、加害の責任者を裁く、実態を明らかにする……ということをやらざるを得なかったのです。国や地方自治体等の公的なところがこの問題に対応するようになるためには、日本はまだ大きく変革されなければならないと思いますが、現状は民間の手でやるしかない、というところ。す。

板橋：ありがとうございます。今、チャットの方にご質問をいただきました。読み上げますと、「女性に対する戦時性暴力において性が強調されることをどのようにお考えでしょうか。強かんより性暴力よりきちんと暴力として議論される方が意義深いのではないかという立場もあると思います。安保理決議 1325 号など、本質主義的アプローチを取る政治戦略としての性の利用については理解できるのですが、それ以外に性を強調する意義はあるとお考えでしょうか。」

池田：先ほども申し上げましたが、暴力の問題、例えば人を殺めてしまったり、殴ったり怪我をさせたりすることは犯罪であり、昔から加害者は罰せられてきました。けれども、性暴力では、それを告発する、処罰するということ自体が当たり前になってきたのは近年になってからです。女性が性暴力被害を訴えられるようになったのは、女性の人権が認められ、女性差別が問題視されるようになってきたが故にできるようになったことです。殺人もさまざまな暴力も性暴力も許されるべきものではないですけれども、その被害

と加害にきちんと対応していくようになった歴史はまだ浅いと思います。だからこそ、性の問題、性暴力の問題に取り組むことには重要な意義があるのです。

私は、ちょうどウーマン・リブが盛り上がった時代に大学時代を過ごしました。その頃の日本は、全共闘運動もあればベトナム反戦運動も続いていたし、他にも沖縄返還闘争、三里塚闘争などもあって、まさに“政治の季節”でした。そういう時代に、なぜ私がマスコミで仕事をしようかと思ったかというと、当時のメディアがウーマン・リブの運動などを「ブスのヒステリー」とからかうような言い方をして、上から目線で下々の女たちの動きを見ているような報道への疑問と怒りがあったからでした。採用される女性の数は少なかったですが、メディアの中に入って、男女格差や女性への差別をなくしていかなくてはと思って就職しました。なので、性を巡る問題とか女性の問題は意識してやってきました。しかし、そうした問題はNHKではあまり取り上げられないため、企画を通すのにすごく苦労しました。今はだんだんと当たり前に見られるようになってきていますが……。『痴漢と闘う』というテーマで、今の『あさイチ』の時間……昔は「奥さんごいっしょに」とか「おはようジャーナル」「おはよう広場」とかいていた時代に、初めてそのようなテーマで番組を作ったこともありました。社会の少しずつの変化と並行して、メディアも性の問題に対応していかなければいけないと思っています。今でも性の問題を女性への人権侵害、差別問題として捉えていく姿勢は大事ではないかと思っています。

板橋：ありがとうございます。では、一つコメントを読みます。「日本政府も裁判所も上に行くほどどうしようもない。市民が民度を上げてスイスのようにイニシアティブ、レファレンダムなど導入すべきと考える」といただきました。

定時になりましたので、一旦ここで仕切りとして終了させていただきますが、池田先生にこの後、お残りいただけたらということでしたので、ご質問くださった方で残れる方は残っていただいて、それ以外の方で質問されたい方はこの後も残っていただければと思います。

池田先生本日は素晴らしいご講演をいただきましてありがとうございました。

\*\*\*\*\*

板橋：では、引き続き質問を読みます。「きちんと謝罪をして、わだかまりをなくした方が良いと思うのですが、『慰安婦』問題をなかったことにしたい人達は、なぜなかったことにしたいのでしょうか。」

池田：いろんな団体とか暴言を吐く政治家の方達をざっと見た感じで共通して言えることは、歴史修正主義の立場に立っているということです。あの第二次世界大戦を「皇軍」によるアジア解放の「聖戦」として捉えており、「その『皇軍』が『慰安婦』制度のような道徳的にも問題のある犯罪的な制度を持つなんてことはない、被害者だと言っている女性たちは戦場の売春婦のようなもので、いろんな事情があるにせよ、ある種金儲けの人もいたであろうし、やむを得ないから身売りをする・された人もいたであろう。けれども、決して日本軍が連れ歩いたものではない」という立場です。安倍元首相が言われているように「『慰安婦』は性奴隷ではない、強制連行の証拠はない」等と言って、「国が責任を問われるような戦争犯罪には当たらない、民間業者がやったことである」として、国と軍の関与を否定するところが、歴史修正主義者には共通して見られます。そのような論文や研究書を書き、被害女性の証言の一部を出してきては「こんなケースも

あるから、これは「慰安婦」被害者ではなく売春婦だ」というような言い方をすることもあります。こうした暴言に関しては、wam でも調べ上げて展示をしたこともあります。今はよくネットに氾濫しているフェイク情報と言われたりしますが、「慰安婦」被害者の方が生きておられて聞いていたら、ぞっとするような罵詈雑言が入っています。これらはたくさんの証言や資料によってすでに明らかにされていることを否定するものですが、これらが「慰安婦」を否定する人々の共通認識なのです。

今は、「慰安婦」を否定する人達についての調査はレポートや本になっていますから、お読みになると分かります。安倍首相時代の閣僚の 18 人中 12 人が「日本会議」という右翼団体のメンバーだったりする訳で、「慰安婦」に関しては特定の歴史を否定する見方をする人が政治の中枢にいる……ということがとても大きな影響を与えていると思います。

板橋：ありがとうございます。では、他の質問で「戦時性暴力問題の解決に向けた具体的な方法を巡ってムクウェゲ医師とお話をされて最も印象に残ったことはなんでしたか。時代や場所を越えて共通して可能なこととして何があるのか、どのような共通点があるのかに関心があります。」とのことです。

池田：共通点というのは、「慰安婦」問題をやっている者とムクウェゲさんのような戦時性暴力をやっている方との共通点ということですか。

質問者 1：どちらも解決の難しい問題として残っていると思うのですが、解決に向けてお話される中で、何かヒントというか印象に残ったことというか、解決に向けてという意味で、どうだったのかなと思いました。

池田：ムクウェゲさんは「慰安婦」問題に取り組んでいる私たちの活動や内容に共感して下さったのですが、お話を伺ったりして共通する課題だなと思ったのは、被害女性たちの自己否定、恥ずかしいというような気持ち、深く傷ついている気持ちを変えていくためにはどうしたら良いか……という問題でした。ムクウェゲさんは随分女性たちに話しかけ励まされていましたが、やはりそれはとても大事なことだと思います。「慰安婦」の被害者の場合も、彼女たちが求めているのは初めからあまり変わらないのです。酷い実態をちゃんと事実として認めてほしいということ、その犯罪に対して日本政府が公的な謝罪をするということ、そして、その謝罪の証として賠償してくれること、そして、このようなことを二度と起こさないために、次の世代に教育をしていくこと、証拠や証言、資料を残しておくためにミュージアムや博物館を創ること……そうしたことを日本政府がやってくれたら、よくぞそこまで解決に向けて行動してくれたということで、被害女性たちは、日本政府に「よくやって下さいました、分かりました」と言って和解が成立しただろうと思うのです。

実際にムクウェゲさんのドキュメンタリー映画の中でも、裁きの問題が描かれていましたが、裁いた上で納得できるかと、それも非常に難しいところだと思います。コンゴでも兵士たちに強かんさせた上官の責任というのがなかなか問われない状況は分かったのですが、共通して今言ったことが、どのような地域の性暴力の問題にも共通して、解決しなければならないとされていることではないかと思います。

北京女性会議の時にいろんな地域、ヨーロッパから南米からアジア各地からの参加者が集まった NGO フォーラムのワークショップでは、自分たちの体験が語られていました。共通して言える解決のための道筋

は、やはり事実認定をすること、謝罪と賠償をすること、教育をして記録を残していくこと、根絶に向けて次世代や他地域に伝えていくこと……などでした。こういうことを実現していく中で、被害女性たちが自分自身を取り戻していくのだと思います。「これは私が恥ずべきことではなく、私は酷い被害を受けたのだ。恥ずべきは加害者の方だ」、だから、「それを恥じて暗い気持ちで生きることはない、もっと前向きに生きていいんだ」というように変わっていくためには、今言ったことが実現できればいいのではないかと思います。

私も 30 年以上、各国の被害女性たちと共に活動をしてきて、今では亡くなられている方がほとんどですが、やはり女性たちは途中からだんだんと変わってきました。初めはもう、台湾の女性たちなんて、裁判に訴える時でも本名は出せませんでした。原告 A, B, C, D……というように匿名で訴えていましたが、それを韓国の女性たちから、「どうしてあなたたちは本名や顔を出せないの？ 恥ずかしいことじゃないでしょ、恥ずかしいのは日本軍なのよ」と言われるような論争の場に立ち会ったこともありました。そうした経験をしていく中で、台湾の女性たちは、彼女たちを受け止めてくれる人たちがいたからこそだと思いますが、自分を語れるようになっていったのです。声がしっかりとしたものになり、目力が宿ってきて、人に接する時も非常に堂々として朗らかに自らを語るようになり、私などが嫌なことがあって沈み込んでいたりすると、逆に「元気を出しなさいよ」と励まして、愛情をしめして下さいました。被害女性たちが変わっていく様子を見ていて、被害からの回復とはこういうことなのだなと実感できました。ムクウェゲさんの映画の中でも女性や少女がだんだんと語れるようになり、いろいろなことが元気に出来るようになっていく様子が見えて、これも共通しているなと思いました。

板橋：ありがとうございます。それでは次の質問です。

質問者 2：ムクウェゲさんの話は日本ではノーベル平和賞を受賞したという形で紹介されて、戦時性暴力が国際社会で認められる過程で、非常に日本軍の被害女性たちの運動は大きかったと思っています。もしよかったらその点をもう少しご紹介いただければと思います。

池田：日本の中でムクウェゲさんをご紹介する時に、ムクウェゲさんの発言として、コンゴの戦時性暴力と日本の「慰安婦」問題は共通するということや、こういうことで彼は頑張っているという情報をちゃんとメディアが伝えてくれたらもっと分かりやすくなるのに……と残念に思います。ムクウェゲさんについて本を読んだり映画を見たりするとちょっとは分かるのですが、本当に素晴らしい方を紹介していただける機会は代えがたいので、今回のような企画はたいへん有難いと思います。

(延長時間分の質疑応答後半省略)

板橋：本日はどうもありがとうございました。

\*\*\*\*\*